英国病理学会（Sheffield Pathology 2024）派遣報告書

浜松医科大学医学部医学科　腫瘍病理学講座
酒井　康弘

このたび、日英交流事業の一環として、2024 年 6 月 18 日～20 日にイギリス・シェフィールドで開催された英国病理学会（Sheffield Pathology 2024）に参加する機会をいただきました。今回は、英国病理学会と大会事務局の間で行き違いがあったようで、speaker invitation がなかなか届かなかったり、当初の programme に私たちの発表枠がなかったりと、学会直前まで気を揉みましたが、無事に invited speaker として参加し、英国病理研究者と交流を深めることができました。

シェフィールドはロンドンの St. Pancras 駅から East Midlands Railway で 2 時間ほどの距離にあります。めぼしい観光地は少ないものの、街全体にシェフィールド大学（University of Sheffield）の関連施設が林立しており、勉学研究に励むのに好適な環境が整えられている印象を受けました。レンガ造りの伝統的な建築物が建ち並ぶ中で、2022 年 12 月に完成したばかりのひときわ近代的なシェフィールド大学のホール“The Wave”にて本学会は開催されました。

英国病理学会は冬と夏の年 2 回開催され、前者は基礎病理学の、後者は病理診断学の研究発表を中心にプログラムが組まれています。今回は microbiome が目新しいテーマで、病理学を疫学・細菌学方面から有機的に統合させた斬新なシンポジウムでした。加齢・自己免疫疾患・癌の発症を microbiome 等の環境因子から紐解いていく内容は、さすが疫学発祥の地ならではの切り口で、新しい病理学に驚きと感銘を覚えました。Oral presentation のセッションでは、trainee（病理専門医取得前の専攻医）や undergraduate（学部生）が積極的に発表していたのが印象的で、癌や変性疾患の immunoprofile/genetic profile の解析や AI 研究などの成果を、座長の教授陣たちを相手に果敢にアピールするエネルギッシュな姿勢に圧倒されました。一方で、海外のプレゼンテーションは大きなジェスチャーを交えて緩急自在に話す様子を想像していましたが、実際は持ち時間の中で研究結果や考察を早口でぎっしり詰め込むスタイルの先生が多く、意外に感じました。

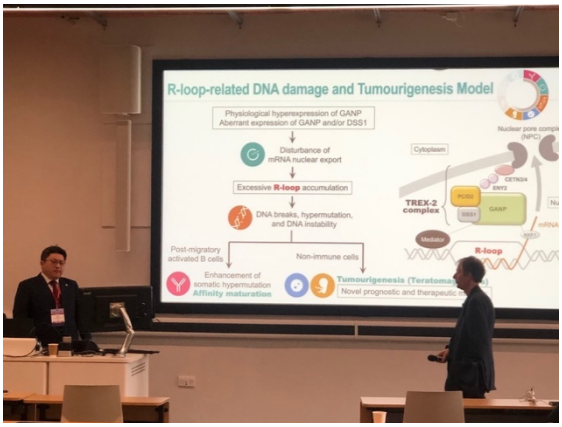
私も学会 1 日目の午後に“Elucidation of lymphocyte dynamics and development of a tumourigenesis model based on the GANP/DSS1 family”という演題で、B 細胞ダイナミクスから発癌・抗がん剤感受性機序まで、転写共役型 DNA 傷害を基軸として幅広く講演しました。座長は University of Aberdeen の Prof. Murray で、数々の著名な論文を執筆されている篤学者を前に緊張しましたが、とても好意的な質問やコメントをいただき、今後の研究の大きな励みになりました。講演後にもわざわざ私の所に質問にみえた先生もいらっしゃり、大変有意義な意見交換ができました。

セッションの合間には、英国病理学会理事長の University of Edinburgh の Prof. Arends や、次期理事長の University of Liverpool の Prof. Coupland よりご挨拶いただき、温かい歓迎の言葉を賜りました。今年の日本病理学会総会にて英国若手研究者として発表された Dr. Wong には、今度は私たちが色々と心遣いをいただきました。また、英国には病理専門医を目指す若手が集う subcommittee があり、その代表の Dr. Field からは日本の病理専門医制度について矢継ぎ早に様々

な質問を受けました。「研究と診断は両立できるだろうか？」「イギリスでも病理解剖数が減少していて経験が得にくい」「全身臓器の病理像を勉強するのが大変」など、国は違えど若手病理医で皆同じ悩みを抱えているのだと連帯感が生まれました。

2 日目の夜には Conference Dinner にご招待いただきました。ホテルから会場までの道すがら、畏れながら Prof. Coupland にシェフィールドの街並みや会場内を案内していただきました。ディナー会場の Cutler's Hall（刃物商会館）は築 190 年以上の grade II*（日本の重要文化財に相当）のレンガ造りの趣がある建築物で、そちらでおいしいディナーを満喫するのかと思いきや、途中からロックバンドによる生演奏に合わせて重鎮の先生方が踊り出したのにはさすがに驚愕しました。理事長の Prof. Arends までもがジャケットを脱いでダンスに興じており、日本病理学会ではまず見られない光景に呆然としましたが、普段は紳士淑女たる英国人のお茶目な一面を垣間見たような気がします。

最後に、今回の派遣に際し理事長の小田義直先生、国際交流委員会委員長の都築豊徳先生、日本病理学会事務局の皆様に御礼申し上げます。また、共に英国派遣に参加した久留米大学の竹内真衣先生とは、学術奨励賞の他、100 周年記念病理学研究新人賞も同時に受賞しており、色々とご縁を感じました。今後も日本と英国の病理学者の交流を深化させるべく、力を合わせて取り組んでいきたいと思います。



左上：Sheffield Pathology 2024 の会場（シェフィールド大学 "The Wave"）。右上：小弟の発表の様子と座長の Prof. Murray。左下：会場内にて（右から竹内真衣先生と小弟）。右下：Cutler's Hall での Conference Dinner。